

「カテーテル感染を契機に生じた化膿性脊椎炎の一例」

沖永良部徳洲会病院 五十嵐昭宏

98歳女性。カテーテル挿入を原因としてMRSAによる菌血症を生じ、その後化膿性脊椎炎を呈した症例を経験した。腸閉塞で入院後、輸液ルートとして留置していた中心静脈ラインからMRSAの感染を来した。当初、カテーテル感染症としてカテーテルを抜去し、VCM11日間投与を行った。状態は軽快し、VCMは終了となった。その後発熱は認めなかったが腰痛の訴えが頻回となり、腰部MRIにて化膿性脊椎炎の診断となった。化膿性脊椎炎は通常、発熱と腰痛の訴えがある場合に疑わなければならないが、他疾患・病態が合併している場合にはしばしば発見を困難にし、高齢者のありふれた腰痛として見逃してしまう可能性もある。また、慢性化例など、必ずしも発熱を伴わない場合もある。しかし、リスクのある高齢者の腰痛の訴えの場合、本疾患も鑑別の一つとしなければならない。